



職業リハビリテーションにおけるカウンセリングの特徴と課題

障害者職業総合センター

No.68

職業リハビリテーションにおける
カウンセリングの特徴と課題

2005年3月

独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構

障害者職業総合センター

NATIONAL INSTITUTE OF VOCATIONAL REHABILITATION



職業リハビリテーションにおける カウンセリングの特徴と課題

2005年3月

独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構

障害者職業総合センター

NATIONAL INSTITUTE OF VOCATIONAL REHABILITATION

まえがき

障害者職業総合センターは「障害者の雇用の促進等に関する法律」に基づき、職業リハビリテーションに関する研究・開発、情報の提供、専門職員の養成・研修等を行う総合的な施設として設立され、独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構によって運営されております。その研究・開発の一環として平成14～16年度に『障害特性に応じた職業リハビリテーションカウンセリングのあり方に関する研究』を実施いたしました。本報告書はその研究成果をとりまとめたものです。理論化が必ずしも十分ではなかった職業リハビリテーションカウンセリングについて、技法的側面から実態調査を実施し、特徴と課題を明らかにしました。

本書が関係者の方々の参考となり、職業リハビリテーションにおける実践を前進させ、障害者の社会参加の一助になれば幸いです。

2005年3月

独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構

障害者職業総合センター

研究主幹 荻 部 隆

執筆担当

依田 隆男 障害者職業総合センター障害者支援部門 研究員

共同研究者として 谷 素子（障害者職業総合センター障害者支援部門統括研究員）が参画した。

謝 辞

本研究の実施及び本報告書の執筆にあたり多くの専門家から貴重なご助言を頂いた。ここに厚くお礼を申し上げたい。

研究検討会委員

- | | |
|-------|----------------------------------|
| 榆木 満生 | 立正大学教授 |
| 八重田 淳 | 筑波大学助教授 |
| 上田 英典 | 障害者職業総合センター職業センター援助課長（平成14年度） |
| 有澤 千枝 | 障害者職業総合センター職業センター企画課長（平成15～16年度） |

専門家ヒアリング講師

- | | |
|-------|--|
| 朝日 雅也 | 埼玉県立大学専任講師（テーマ「職業リハビリテーションにおける知的障害者とのコミュニケーションと意思決定 —社会福祉分野からのアプローチ—」） |
| 南雲 直二 | 国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所心理実験研究室長（テーマ「中途障害者の社会受容 —障害者の就労支援における専門家の役割—」） |
| 牧 裕夫 | 徳島文理大学助教授（テーマ「職業リハビリテーションにおけるカウンセリングアプローチの可能性 —特にスモールステップの多様性について—」） |
| 渡辺三枝子 | 筑波大学教授（テーマ「職業指導におけるキャリア観 —一般者を対象とした職業カウンセリングの視点から—」） |
| 加賀 信寛 | 障害者職業総合センター職業センター職業準備訓練課長補佐（テーマ「障害者職業カウンセラーの専門性」） |
| 森 誠一 | 障害者職業総合センター職業センター援助課長補佐（テーマ「障害者職業カウンセラーの専門性」） |

（敬称略。障害者職業総合センター職員以外五十音順。いずれも助言当時の所属・職名。）

目 次

概 要	1
第1章 はじめに	2
1. 研究の背景	2
2. 研究の目的	13
第2章 職業リハビリテーションカウンセリングの実態	14
第1節 調査の概要	14
1. 目 的	14
2. 調査の手続き	14
3. 分析の枠組	18
第2節 カウンセラーの応答の特徴	26
1. 「基本的傾聴の連鎖」と「積極技法」	26
2. 採用された技法の特徴	27
第3節 個別事例からみた特徴	30
1. 職業リハビリテーション計画策定に際しての相談・調整	30
2. 職業準備支援事業実施中の相談	39
3. 雇用後の相談等	43
第4節 まとめ	51
1. 技法の用いられ方の特徴	51
2. 今後の課題	57
第 2 章 補 遺	59
1. 分析結果の一致度の評価	59
2. Cohenの κ 係数の採用について	61
文 献	63
資 料	67

概 要

本報告書は平成14年度から平成16年度にかけて行った『障害特性に応じた職業リハビリテーションカウンセリングのあり方に関する研究』の報告書であり、2つの章から構成されている。

第1章では、先行文献を手掛かりに職業リハビリテーションカウンセリングと他のカウンセリングとの違いを解明することを通して、第2章の実態調査で扱うべきテーマを明らかにした。すなわち、職業リハビリテーションカウンセリングはその歴史的経緯から技法的な研究が立ち遅れており、その結果、「当事者による意思決定」や「インフォームドコンセント」といった職業リハビリテーションのトピックを面接の方法の視点から検討する基盤が整っていないことが明らかになった。

第2章では、職業リハビリテーションカウンセリングの実態を調査・分析した。すなわち、仮想事例による具体的な対話場面を用い、そこでのカウンセリングの技法の使われ方を分析した。その結果、職業リハビリテーションの面接技術には、一般のカウンセリングの技法の概念だけでは説明できない、クライアントの特性に応じた独特の側面があることが明らかになった。すなわち、一般のカウンセリングでは大きな重点が置かれることの多いクライアントの発言促進、クライアントの自己分析・自己理解の促進における技法の用いられ方は、他のカウンセリングと共通する側面があった。だがそれだけではなく、いくつかの技法の用いられ方に独自の側面が見られ、職業リハビリテーションカウンセリングは、問題解決に向け積極的に行動する応用分野のカウンセリングであることが示唆された。

なお、調査・分析で用いられた方法は、先行研究を基に工夫を重ね、独自に開発したものだが、これは他のカウンセリングや医療・保健・福祉・教育・産業等の多様な対人サービスにも適用可能であることから、今後の実態調査や実践研究等にも資するものとなった。

本研究を通して、職業リハビリテーションカウンセリングは、他のカウンセリングとの間に技法的に共通する要素を持つカウンセリングの一形態であることが明らかになると同時に、職業リハビリテーションカウンセリングは問題解決に向け積極的に行動する応用分野のカウンセリングであることが示唆された。だが一方では、様々な障害特性に応じたカウンセリングのあり方について体系的検討が行えなかったため、今後の課題として残された。